

第 29 話〈五輪塔〉の要約と参考資料

第 29 話〈五輪塔〉の要約

室町から戦国時代の土呂久を語ってくれるのが、佐藤富喜男さん方の鰐口、薬師堂に組み立てられた五輪塔、戦記に名前を残した地侍の 3 つです。それらは、山の自然と地下資源に恵まれ、修験や鉱山のつながりで外に開かれた比較的豊かな山村の顔を見せてくれます。

第 29 話〈五輪塔〉の参考資料

29-1 「母屋」の鰐口

「高千穂・阿蘇」P441 より

鰐口（佐藤市蔵氏蔵）

径 5 寸 6 分、タガネ彫りの銘がある

（表面）

奉施入東林寺薬師瑠璃光如来御宝前

日向州高知尾郷折原村居住国政敬白

（裏面）

応永十九年壬辰九月念九日 （応永 19 年は 1412 年、念 9 日は 29 日のこと）

願主 八郎、三郎

<町指定文化財 昭和 44 年 3 月 19 日>

*文字は、表と裏の年月日と願主は、整った達者な文字。裏の「八郎、三郎」は稚拙な感じ。本人が彫ったか？

佐藤富喜夫さんの話（1983 年 10 月 28 日聴取）

「先」（折原の古い家）の八郎と三郎が、戦に行くとき、勝ったら 12 の仏像（12 神将）をつくってあげると、薬師さんに願をかけた。戦に勝って、無事に帰ってきたので、約束の通り、仏像を自分で彫って奉納した。

この鰐口は、薬師堂にあったもの。

上村幸盛（宮崎市で印刷屋を営んでいた郷土史家）さんの話（1987 年 6 月 11 日）

寄進したのは、百姓はよう寄進せんから、これは名主やろな。願主は、八郎、三郎の名前のつけ方は武士。

県史編さん室室長補佐の永井哲雄さんの話（1987 年 6 月 11 日）

鰐口は戦利品として転々としたりすることがあった。そのたびに奉納され、追銘される。

この鰐口がずっと土呂久にあったとしたら、東林寺が廃寺になり、(当時の寺は庵あるいは堂のようなものだった)、再興(中興という言葉がよく使われる)したとき、また奉納することがあったのかもしれない。

八郎、三郎の銘が、他の銘と違って、彫りも浅いし、字体も稚拙なら、タガネ彫りが初銘、八郎・三郎が追銘ではなかろうか。

鰐口は、豊後(駄原)もしくは肥後から取り寄せたものだろうから、普通の百姓でも難しい。土豪というか……。

*かなり勢力をもった人物が折原村に住んでいたのかもしれない。

日之影町編「郷土の自然と文化財」P50

鰐口

もともとは楽器の一つであったという。扁平中空で、下方に横長に裂けた口があるのでこの名がついた。材質は青銅が最も多く鉄のものの中には見られる。中央の両方に大きな中空の耳があり、その上部に吊り下げるための環がついており、これを仏堂の御拝や仏前に下げ、その前に布か麻で編んだひもをたらし、参拝者はそのひもの下を握って打ち鳴らすようにしてある。

表面の外輪と中輪の中に寄進の社寺名、奉納の意味、奉納者の住所氏名、奉納年月日が彫りこんであり、大きいものでは40センチに及ぶものもあるが、普通は20センチ程度のもが多い。

鹿川観音堂にある直径25センチ、厚さ7センチの鰐口には、

奉寄進鰐口諸願成就皆令満足祈所 大福鉦山住人高見三郎五郎安利

寛永七年九月吉日 (寛永7年は1630年)

願主 日向国高知尾大福大工 豊後国駄原村住人安部次郎佐衛門貞次

とある。

日之影町史には、

一、明暦三年守田三弥によって大吹鉦山発見さる。

一、元禄元年馬場新佐衛門、高見但馬守によって大吹鉦山の採掘はじまる。

としてあるが、寛永七年は、元禄元年より実に58年も前になり、大吹鉦山は寛永以前の豊臣時代か徳川初期には発見されていたのではないかと推測される。

*注目されるのは、明暦3(1657)年に守田三弥によって大吹鉦山が発見された、という説。外録鉦山については明暦元(1655)年、登尾鉦山は承応3(1654)年に始まったという記録(珍書雑記)がある。三弥は正保4(1647)年に刑死しているので、三弥以後のことであるが、外録と登尾と大吹鉦山の関係性の深さをうかがわせる。また、大吹鉦山の発見を16世紀にさかのぼって考えているところも重要だ。外録も、登尾も16世紀に開発されていたと考えられるからだ。

中川鰐口

嶽神社にかけられている。

敬白奉施入東福寺鰐口

応永三十二年乙巳卯月八日 (応永 32 年は 1425 年)

願主 永金貞裕直清

とあり、町内の鰐口では最も古い

* 奉納年月日は、「母屋」の鰐口が奉納されてから 13 年後。同時期に奉納されており、東福寺が檜原にあった修験の本院のことだとすると、土呂久南にあった東林寺も、天台宗の修験と関わりがあったことを裏付ける。

* 「高千穂八十八社」の一社として、七折村中川に嶽大明神の名前がある。

大分百科事典より

鰐口

わが国で最古の在銘鰐口は東京国立博物館蔵の 1001 年（長保 3）のものである。（大分）県内では武蔵町報恩寺の 1398 年（応永 5）銘の鰐口が現在のところ最古のものである

29-2 豊後・^{だのはる}駄原^{いもじ}の鋳物師集団

「大分百科事典」より

いもじ（鋳物師） 鋳物の製造に従事する職人。古くから梵鐘をはじめとする仏具や鍋・釜・農具などを作っていた彼らは、中世には特殊技能者として荘園領主から優遇されていた。しかし後に荘園の衰退が進んでくると各地を渡り歩く者も出て来て、中には地方に定住する鋳物師もあった。（略）室町時代後期になると駄原（現大分市）を中心とした鋳物師の活躍が目だってくる。現在のところ最古の遺例は 1531 年（享禄 4）銘の熊本県阿蘇郡南小国村にある梵鐘で「豊後国笠和郷駄原村大工藤原氏樹新右衛門尉景次」の銘文がある。室町時代後期から江戸時代を通じて駄原では渡辺氏、安倍氏、植木氏の 3 氏を中心とした鋳物師集団が県内各地で活躍している。

「大分県の地名」より

駄原村（だのはるむら） 府内城下の西方に位置し、北は^{せいけ}勢家町、東は^{びしやもん}毘沙門川。北部に集落、西部には丘陵地帯がある。（略）享禄 3 年（1530）の肥後国小国高橋・大宮両社旧蔵梵鐘銘（小国郷の史蹟・文化財）によれば、当村の鋳物師樹新右衛門尉景次が大願主女法名妙栄の依頼により、宮原両神社（現熊本県小国町）の梵鐘を作成している。この他にも、永禄 8 年（1565）の年紀をもつ宮崎県国富町法華岳薬師寺鐘銘に「大工豊後国駄原住 木藤左衛門理次」（宮崎県史蹟調査報告）とあり、有能な鋳物師集団が住んで

いた。(略) 明治元年(1868)の竈改では戸数262・人口1222。豊前道に沿う集落に駄原金屋・駄原鋳物師とよばれる鋳物師が集住していた。製品は豊後国のみならず九州各地や大坂方面にまで出していた。

29-3 「母屋」の五輪塔

延宝二年高千穂庄仏明帳(延宝2年は1674年)

あみだ 3間四方 みなみ村

薬師 礎居

*土呂久南村の3間四方のお堂に、「あみだ」と「薬師」がまつてあることを示す。

佐藤ミキさんの話(1983年1月聴取)

薬師さんは、うち(「母屋」)の畑の尻にまつてあったらしい。大きいイチョウの木もあった。孟宗竹の脇を「堂の前(どんまえ)」と言っている。

清助さん(「先」)の先祖が戦から戻って来て、12の仏像(12神将)をつくってあげた。清助さんとは大きい家で、系図もあったのに、家が焼けてしまった。

佐藤富喜男さんの話(1985年2月24日聴取)

「堂の前」の畑の石垣に入っていた丸や三角の石を薬師さんの堂の横に積んどったちゃけど、灯籠やろうと思うて組み立ててみたところが、ちいと形が違ってたの。畑中に「まあいい石がある」ちゅうので、それをもろてきて組んだら、大きさがちょうど合った。がけ崩れするとき、川を越えて畑中まで流れていったとやろう。郷土史を研究してる人たちが(岩戸バス停前の田尻節蔵、元税務課長の佐藤ひとし……)来てみよらしたが、これは「灯籠じゃなしに五輪塔。むかし土呂久にえらい人がおって、その墓のごとある」ち言わすとたい。

(全部で8基ある。4基は完全に復元できた。石は灰石なので、ぼろぼろに欠けてしまったものもある)

田尻節蔵さんから佐藤富喜夫さんに送られた説明書

仏教の教えによると、宇宙は空、風、火、水、地の5つの要素から構成されているといわれ、その5つの要素を五大という。塔の各面には五大それぞれの種子(しゅじ)である梵語が刻んである。大日如来を供養した塔であるが、特に鎌倉時代以降に墓石となった。

日之影町編「郷土の自然と文化財」P13

密教では、宇宙はすべて空・風・火・水・地の五つが基本になって構成されていると考

えられ、これ等は種字と色と形によって表わされる。地の種字は「ア」と読み、黄色と四角形を意味し、水の種字は「バ」で、白色と円形を意味する。火の種字は「ラ」で、赤色と三角形を表わし、風の種字は「カ」で、黒と半月形を、また空の種字は、「キャ」で青色と球形を表わす。これを組合わせたのが五輪塔で、始めは堂の落成、仏像の開眼の供養のために作られたが、後には墓石や供養塔として建てられるようになった。平安末期から鎌倉時代に多く作られ、地方の支配者とその夫人の墓に限られているようである。

29-4 室町時代から戦国時代にかけての土呂久の人物

折原村居住国政

応永 19 (1412) 年に、「母屋」に保存されている鰐口を東林寺に奉納した。

八郎・三郎

東林寺の薬師如来に戦に行くとき願をかけ、戦に勝って無事に帰ってきたので、約束の通り、12 神将を自分で彫って奉納した。いつのことかは不明。「八郎、三郎」は武士の名前という郷土史家もいた。

国政の子孫か？

佐藤五郎兵衛信興

豊臣秀吉が、薩摩の島津と戦う豊後の大友を応援し、九州征服を始めた (1586 年)。大友方についた日向の先鋒土持親信に「多くの高千穂の武士達が従軍して居るが、中でも岩戸の佐藤一族が緒方攻めに加わった事が、筑紫軍記に見えて居る。」「岩戸五ヶ村岩戸五郎継元、岩戸土呂久佐藤五郎兵衛信興等が活動している。軍記に書かれる様であるから相当な働きをしたものと思われるけれども、具体的なことはわからない」(西川功著「増補版高千穂太平記」P409~410)

佐藤氏系図 (同書 P215 ; 土呂久荒谷に掲示) には、佐藤忠信—忠治—継元 (岩戸五郎 五ヶ村ニ住ス) —信興 (五郎兵衛 岩戸土呂久ニ住ス) とある。

* 信興を忠信のひ孫としたのでは年代があわないが、土呂久の荒谷に住んでいて、この戦に参加したのは事実であろう。